り　出帆しかけた東華丸のあとを追ひかけて清水まで運んでもらつた。

翌朝　私は朝早く駿河湾頭に立つ富士の高根を仰いだが　富士の姿が実に醜く見えた。よく見ると　形が明かに変つてゐる。こんな富士山の形なら　この湾の富士のすきであつた高山樗牛も賞美はしなかつたであらうと思つた。

「あゝ　富士までが狂うてゐる！」と私は心の内で思つた。

帆船に乗つて　清水港に上陸したのは九時一寸前であつた。その日私は三保の美しさも　羽衣松の神秘をも考へる余地がなかつた。私はたゞ京浜の惨状が眼の前に浮んで　如何にしてか　それを救ひたいと思ふ一念で一杯であつた。

帰つて来てから　二日間は十分眠ることが出来なかつた。日が立つと共にその惨状が現実的になるのであつた。つまり私は夢心地で東京　横浜を歩いて来たと云ふことを知つた。そこを歩いてゐる間私は涙を一滴だに流さなかつた。そして　涙を流してゐる人をも見なかつた。然し　そこを去つて　神戸に帰つて一瞑想すると　私の眼には涙が滲むのを覚える。

「あゝ　Mも死んだ。Sも死んだ。誰れもやられた」

さう思ふだけでも悲惨だのに　私はそれが幾十万人であることを思ふと　ぢつとして居られない。

今　私は全く精神的無能力者のやうに茫然として机の前に坐つてゐる。私は何から手をつけて善いやらわからない。

先づ　東京　横浜の疵口を癒やさねばならぬ。それの癒える日まで私は半狂乱者である。

焦土を彩色せんとして

天幕に日は暮れた。

田井君が　蠟燭に火をつけて持つて来た。まだ折畳み式のカンバスベッドもその儘になつてゐるし　夕飯も食はずに居た。

横川小学校の小使さんが　夕飯に案内してくれた。私等三人は薄葉君ひとりをテントに残して　小学校の小使室に　夕飯の御馳走になりに行つた。黒味噌の中に貝が這入つてゐた。それでも震災当時のことを思ふと大きな御馳走である。感謝して戴いて薄葉君と代つた。

蠟燭の火で七つの寝台をひろげ　四つを我等四人の寝台にあて二つを椅子代りに使用し残りの一つには荷物を一杯にのせた。

九月二日に神戸を船で立つた私は四日には芝の明治学院で寝た。東京に五日六日とゐたがキリスト教の救護団に金が一文も無いことを知つたので　直に神戸に引返して来た。そして約四十回の講演会に七千五百円近くの入場料と席上義捐金を得て　それを東京に送つたが　私は十月五日　神戸に帰り　七日また東京に向つて出発した。そして今度は　東京横浜の救済事業を徹底的に研究し　この冬の防寒運動に参加したいと思つて出かけた。その時私は内務省　東京府　東京市を各々訪問して蒲団に対する用意が不十分であることを知つた。それで　私は直に十月十四日　神戸に引返し　大阪朝日新聞社後援の全関西婦人聯合大会に　蒲団の欠乏を訴へた。

そして　十月十六日　直にイエス団の同志四人と一緒に船で東上

した。

今度は東京　横浜に送る雑誌　蒲団　綿入　下駄など四十梱の荷物を持つて船に乘つた。船が十七日の朝　横浜に着くや否や　ハッチの開くのを待つて　みんなで荷上げして　横浜の青年会館まで運んだ。

その日の午後　私は半噸の荷物自動車に乘せられて　本所深川を見て廻つた。そして私はもと婦人矯風会の外人部が経営してゐた興望館跡にバラックを建てゝ隅田川以東の防貧事業に努力し出した。

金曜日（十八日）に　私は例の半噸の荷物自動車にアメリカの赤十字から日曜学校協会が貰つた五つのテント（その中の三つは三間に四間の大テントで　外の二つは十二畳敷のピラミッドテントであつた）をのせて　本所松倉町に走つた。神戸から連れて来た青年達は　朝早くから横川小学校の為めに他の大テントを建てゝあげてそこで野天で日に曝され乍ら勉強してゐる児童が授業を受け得るやうに運んでゐた。

テントを張るのは半日仕事であつた。中央に棟木をあて三本の柱を棟にあてがひ棟の左右に麻縄を張り　それを一方から引き起し杖縄を材で止めるのである。一寸見ると簡単なやうに見えるが　なか〳〵按配よく真道に立たない。然し　張り終ると　カーキー色のカンバス・テントの美しいこと！　私はシナイの荒野にモーゼが張つた神の幕屋も嘸　このやうに美しいものであつたらうと考へた。

私は　天幕の恰好よく張られたことに見とれてゐた。

淋しい武蔵野の昔に帰つた本所の焼跡には　近処で話してゐる言葉さへ　人なつかしく聞ゑる。それが　澄んだ空気で——この附近には二百軒近く鋳物工場があつたと云ふが　その煙突が凡て地震と火事で倒れて了つたのであつた——本所から富士が見えると云ふ。その変つた塵埃の無い夕空に　私は何だか　私が夢想して居た『空中征服』が一夜の中に出来たやうな気がした。

私はシナイの荒野に天幕を張つたイスラエル人のやうな心持ちで祈りつゝ幕屋の中に這入つた。

震災以後　繰返して読み耽つて居るヨハネ黙示録をもう一度ピラミッドテントの中で一章だけ読んでみた。

そこに　聖徒の祈りが　香の烟となつて天に昇り　神の位に達した時に　神はその香の烟に火を混へて　地上に投げおろしたところが　地は忽ち震ひ　大きな地震が起つたと書いてある。

かぼそい聖者の祈りが　神秘的に宇宙の神と感応して　地震を起すのだと云ふこの大きな表現主義の著者の心持ちを　灯の暗い天幕の中で味ふと　ローマ時代の昔が思ひ出される。

あれほどまでに呪つたローマ——地上の淫婦　亡ぶ可きバビロンだと罵つたローマが忽ちに滅亡した。あの様子を幻の中に見た黙示録の著者は　今　現在わが日本の現状を予言してゐるのではあるまいかとも考へられる節が多くあつた。

星が手をのばすと届く位　近く鋭く輝く天幕の外は馬鹿に寒い。

木立君と　田井君と　薄葉君と　私の四人で　カンバス・ベッドの上に腰をおろし　聖書を読んで祈つてゐると　一人の青人が這入つて来た。名刺をわたされて話をきくまでそれが誰れであるか気附なかつた。

然し話を聞く中に　四年程前に　大阪の天王寺公会堂で日本労働総同盟の大会のあつた際　東京の三田土ゴムの代表者の中に加はつ

て来られた宮原武雄君であつたことが　うろ覚えに思ひ出されるのであつた。

宮原君は　その後明治大学を卒業して　辯護士試験に及第し　今では辯護士であるのを見て　私も驚かされたことであつた。

こんどの大震災に　父君の家も焼かれ　同君も滝の川の友人の宅に避難せられてゐたが元来　侠気な同君は　出身校である横川小学校のバラックに自ら這入りこんで　何くれとなく　貧しい罹災民の友人となつてゐられたのであつた。同君はこれまでも　本所方面の貧民問題に就ては詳しく研究して　それを著述に纒めて発表せられたこともあるし　最近はモリエル全集の飜訳に手を染められたのであつた。

話をしてゐる中に　昔話が面白くて　色々と　私の過去の労働運動の古傷も示されたことであつた。天幕の中は黄色く見える。四隅に運んで来た色々のものが静かに積み重ねられてあるが夜が更ると共に　一々瞬きをして　我々の物語してゐることを聞入つてゐるやうに見える。天幕の南側には焼死したものもあると見えて　凹んだ屋敷跡の焼トタンの中に卒塔婆が立つて　その前に花が手向けてあるのを昼間みたが　墓場のやうに寂しいこの本所横川では　人間の退却と共に　無生物がみな甦つて来たやうに思はれた。

ピラミッド・テントの息抜きから　妖怪がのぞき込んでゐるやうに考へられる。天幕の外側には焼け死んだ被服廠跡の幽霊が立つてゐるやうに感ぜられる。被服廠跡で鳴らす夕べの礼拝の太鼓の音が近くに聞こゑる。風さへ無い静かな宵だ。

宮原君が色々の話をせられてゐる中に　九時も過ぎたやうであつた。私は昼の疲れで病める眼を開いて居ることが出来なくなつた。宮原君は　私が眠くなつたのだと察して「また明朝」を約して引上げて行かれた。

私が本所でしたい仕事は、要するに神戸の仕事をその儘ここへ持つてくることであつた。焼け爛れて了つた武蔵野の曠野に甦る可き多くの霊があるにしても　一度に幾十万人の貧民を作つた今日　隣人としての私達は防貧に救貧にお助けしなければならないのである。

殊に金でお助けすることが出来るものと　金でお助けの出来ないものとがあるから　私達のやうに金の無いものは　善き隣人としてお近づきになるより仕方が無い。

私の第一にしたい仕事はセットルメントである。此の冬を通じて罹災者の困苦を自ら体験し　バラックの苦悩を自らも一緒に味ひ　それを科学的に調査して　世間に訴へることである。つまり私は『眼』になりたいと云ふことであつた。

統計報告には『心』が書いてない。救貧運動の根本は心である。物質の欠乏より起る心理的反応である。悩みである。悶えである。

さうした罹災者の悲しみを統計で現すことは到底出来ない。それはどうしてもセットラーとして　テントや　バラックに住んでみなければわからない。

それで　私は別の外の救済事業をしなくとも　罹災者の眼となり耳となり　口となつて　世間に罹災者の窮状を訴へさへすれば　私の任務の大半は消えるのである。

その上もしも　私達が少しでも　塵ほどでも罹災者の苦しみを我

等の背に負はせて貰ふことが出来るなら　それほどうれしいことは無いのである。

それで　罹災者達が自ら自己の互助の力で立ち得るやうにお助けすることが出来るならそれも結構である。

即ち　組織（オーガーナイズ）する仕事が私達の仕事である。窮して居る人々の現状に触れて何からお助けして善いかを見ると共に　お金を出さなくとも　困窮して居る人々の自力で　それを突破し得る方法を考へて差上げるのである。

それが真に親切なセットルメント・ウオークである。隣保運動を慈善事業の如く考へる人がある。それを資本家の道楽仕事のやうに考へる人がある。然し真正の隣保事業はそんなものではない。倫敦のトインビー・ホールなどのやりかたを見ても　それは社会を組織化する為めに　下層な人々の秩序のない所にも組織を作つて行く運動であるのだ。

それは生理的方面には母の会　老人会　疾病会　互助会などを『セットルメント』を中心として組織して　生理的の困難から抜け出るやうに助け合ふやうにする。

心理的方面には幼年会　青年会　処女会　読書会　劇曲クラブその他の趣味のクラブを組織して　その地方の智的情的向上を計る。

精神的には　日曜学校を開き　夜学校を設け　講座を開設し　また宗教的集会と互助の組織を作り　その地方の燈台とならねばならぬ。

こんな考で　私は松倉町のバラックを建て初めた。

今年の一月丸髷を結つて　一人の女が一身上の相談に就て神戸の私の宅を尋ねて来られた。それ以来新生の悦びに這入つた渡辺照子さんはイエスの友の最も忠実な働き人である。此度もイエスの友が救護運動を初めた時に　婦人矯風会から遣はされて神田美土代町の青年会の働き人数十名の炊事に廻されて来たが　その奉仕振はみなのものの感謝するところであつた。

信仰の生活から云つてもまだ新しい渡辺さんは　私が出てくると共に　私を助ける為めに　直に矯風会を出て　産業青年会のメトロンとして助けてくれることとなつた。

働き人の最も苦しいことは　栄養の悪いことと　痒いところに手のとどく女性の注意の欠乏である。

幸に　イエスの友の同人には渡辺さんのやうな人もあり　柳川さんと云つて　女学校を卒業後長く女工生活を送つたしつかりした婦人があり　渡辺さんより先から　私がテントを建てると　すぐ手伝に来て下さつて　私がハウス形のテントを二つ　ピラミッドのテントを二つ建てゝ　テントの内部を混雑せしめて居た時に整理の任に当つて下さつたのであつた。その他にも義務的の婦人が沢山あり隠れた女性の努力に預ることが出来るのであつた。

かうして　炊事の方は心配がなくなつた。朝は赤味噌に蕪（かぶら）をたゝき込んだ　実に甘（うま）いものが食へる。テントの中で澄んだ秋の空を眺め乍ら食ふことは　実に有難い配合であつた。

星の瞬き

月の影

天布越しに
のぞき得る
白き光の
その栄は
そこに住みてぞ
悟らるゝ――
南京米に
豆腐汁
今朝の料理は
甘かつた
秋の大空熹ひつゝ
茶碗の湯気が立つて行く

かう　私が渡辺さんの新約聖書の端に書いたのは十月二十九日の朝であつた。

十一月一日の夕方　薄暗の中に法被を着た一人の青年がバラックを訪問してくれた。それは　京都で大林組が二百四十名の大工を募集して　東京に送つて来た人達の一人であつた。少し働くには働いてみたが　十一月一日の朝に　休みを利用して　上野の山から下町を眺めてみると　とても金儲けをする気にはなれないと云ふのである。

彼は二十何円か儲けた金を持つて　直に松倉町の私のテントを訪問してくれた。

「とても　東京で儲ける気にはなれませぬ。たゞで善いから困つた人の為めに奉仕させて下さい！　今日までに儲けた金は凡てあなたに捧げます！」

かう云つた感激の言葉で　天の使の如き姿を以つて我等の間に現れて来た。名は田中源太郎と云ひ　純粋の筋肉労働者である。彼は奉仕の生活に逞入つてから　朝五時から　晩の十一時まで　産業青年会の為めに　炊事場の建築から　便所の設計　机から炭取りまでたゞ感激の中に全き創作の喜びを以て労働して居るのである。彼は

『めぐみの　ひかりは
わが行きなやむ
暗路を照らせり
神は愛なり……』

と云ふ讃美歌を口ずさみながら　新しい東京の為めに全精力を傾倒したいと云つてゐる。

末弘博士と会つたのは　二十三日会の席上であつた。その日の討議は失業問題が中心であつたが　一寸したことから　バラックの改造問題が話題に上つたが　私と末弘さんの意見が全然一致することになつた。それで十月二十日であつたと思ふ。二人で当局に打当つてみた。当局も決して我等の心配してゐることを無視してゐるわけではなかつた。我等もたゞ批評の為めに　批評したくはなかつた。それで喜んで君等の意見を聞かうと云ふこととなり　そこで震災救護打合会なるものが産れた。末弘厳太郎博士のあの小さい身体だが――然し体育でかためた身体で（先生が荷物自動車の上から　ポンポン飛ばれる勇気には私も驚いて了つた）一生懸命に各方面のバラックを心配して調査せられ　遂に一燈園の松下君などを中心にして

一燈園から十数名の人手を借り　震災救護調査の常設的なものを最も科学的に行ひ　救済事務の交換局のやうなものを作ることが出来ることになつた。末弘博士は自分で金を持つて来て謄写版を買ひ求められ　備品を運び　最も愉快な奉仕振りを発揮せらるゝに到つた。

早稲田の学生は　帆足理一郎君を中心にして九月五日頃から既に大活動を始めて居た。信愛学舎の名は私に取つてはDear nameであつた。本所の細民区域がそのまゝ復活することを知つた私は　早稲田の人々に訴へた。直に五十三名の義勇的志士が現れた。彼等は北沢新次郎氏と帆足氏を中心として　細民調査に　奉仕に　主として私の力を入れてゐる本所区の為めに尽して下さることになつた。私は心からそれを感謝した。何だか自分にしてくれるやうに思はれてうれしかつた。信愛学舎の同人鈴木実さんは十二月に入営するまで　私と一緒にバラックに住んで下さつてゐる。そして快活に奉仕して下さつてゐる。

市内の各大学　各専門学校のキリスト教青年会も　調査班の義勇隊として　三十名の一団となつて奉仕カードにサインしてくれた。

新しき東京の為めにと　われもわれも競うて奉仕を申込まれる方が少なくない。毎日一人か二人は必ず奉仕を申込まれる。

私はそれをみて　日本人が美しい民族であり　強き民族であることを思はせられる。

日本にはまだ望みがある。東京が焼けても東京は必ず復活するであらう。その復活はたゞ　請負師のやうにこの国民の苦難に際して暴利を貪らんとする輩の力にはよらないで　私などの眼には這入らないが　各方面の隠れた努力をなしつゝある多くの奉仕者の力によると思ふ。

私は急がしく　講演会から講演会に駆け廻つてゐる。昼間は多く各学校の要求に応じ　晩は集団バラックや各教会を順次に廻つて苦難を通じて国民の甦る可き態度に就て論じてゐる。

電車が九時までしかない時には講演会の帰りに随分困つた。脚絆に背嚢と云ふ扮装で　私は到る処講演会のあるところで泊めてもらつた。十時まで電車があるやうになつて　私は少し悠然とした。然し毎晩本所まで帰る為めに　十二時頃まで歩くことは珍らしくなかつた。

然し　霧に閉ぢ込められた隅田川の上を十二時過ぎにぶらりと一人で歩いて渡ることは私に取つては黙示であつた。あのホキスラーの『午後十時』の気分は私がいつも吾妻橋を夜に渡る時の気分である。

工兵隊が徹夜して電車の為めに木橋を作つて居た。その大きな力を見た私は吾妻橋を夜中に渡る度毎に感激を受けるのであつた。

濁つた水と　洗ひざらしの白服を着た工兵の姿は　何とも云へない神秘的な配合であつた。その上をアセチリン瓦斯の五百燭光位の光が照らす。『一　二　一　二……』の号令で木材が運ばれる。焼け爛れた東京の真中に奉仕を誇りとしてゐる工兵のこの徹夜の努力に感激しないものが何人あつたらうか？　人を助ける為めの軍隊の

組織程有難いものはない　そして　人を殺す為めの組織としての軍隊ほど恐ろしいものはないと　私は橋の上で涙を眼に滲ませ乍ら考へたことであつた。

貧しい子供等が　木を見たいと云ふ。徳川水戸侯にお願して庭園を開放してもらつて戸山軍楽隊の薄い音楽を焼けた林の中で江東の子供等に聞かせた。私は子供等の胸から早く痛ましい悲しみが去り新しい光明が来る日を待つ。

私は本所から深川まで　江東全部を自分の仕事場と定めてゐる。

『私は焦土の上を　備碧の色で塗りたい』

さう私は自らに云つた。私等の芸術はたゞ画布の上の芸術だけであつてはならない。私等の芸術は　地球の上にぬり付ける生命芸術でなくてはならぬ。

私は被服廠跡で焼け死んだつもりで働かう。かうきめて　私は防寒運動に出て来た。

此の冬は幾千人か凍死するものが出て来よう。嬰児は今のバラックで育ちさうにもない。上野にも　浅草にも　日比谷にも　丸の内にも幾百の人々がこの寒空に屋外に莚を着た儘寝てゐる。

この間も　うちの渡辺さんは　夜中に起き上り　自分の袷の古着を五、六枚持つて何も知らずに寝てゐる浅草の莚の無い哀れな無宿の人々の上にかけて廻つた。

私は涙ながらに渡辺さんを賞めて云つた。

「――それらの人々は眼が醒めた時に　衣服が何処から降つて来たのかと疑ふでせう。天の使は毎晩　現れるが善い……」

私達は今　それらの人々の為めに早くテントが与へられるやうに市にせがんでゐる。

天の使は地上に住んでゐる可き筈である。我等はそれ等の天の使の道をつける役になりたいものである。

（一九二三・一一・一三　本所松倉町のバラックにて）

おゝ我等は狂ふ

私等は狂ふて居ます――おゝ神さま　それは　私等が地球が恐いからではありませぬ。また火事が恐ろしいからでもありませぬ。私等には　愛なる神が何故わが同胞をかくは多数に奪ひ　猶ほその残れるものを饑餓と　寒気と　懊悩によりて苦しめ給ふかを疑ふ為めであります。

私等は　愛の為めに狂ふてゐるのです。愛したい為めに狂ふてゐます。私等は恋人の如く　わが同胞を愛してゐます。その同胞を何故あなたはこんなに苦しめなさいますか？

恋人を奪はれたものは　みな狂ひます。そして　私等は　あなたの我等に与へ給うた恋人ならぬ恋人を持つて居ります。奪ひ去りなさる場合は　まだあきらめます。生かした儘苦しめなさるので　私等は堪えられないのです。

私に一人の恋人があります――それは日本です――花の乙女の日本です。誠に日本こそ我等の最も愛する恋人です。その日本をあなたは　花のしとねの中より取り出して育て　富士と中禅寺湖と太平洋をもつて私等を飾り　桜とあやめを彼女の頭に結び　澄める秋の